

# ユスティニアヌスのエチオピア遣使について

荻 野 博

## I プロコピウスの遣使の記事

プロコピウスは、東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世(527～565在位)の治世に行われたペルシア、ヴァンダル、および東ゴートとの戦争について叙述した『戦史』(Huper tōn Polemōn Logos Prōtos)の中で、ユスティニアヌスがペルシアに対抗するために、エチオピアおよびその支配下にあった南アラビアのヒムヤル Himyar (ホメーリタイ Homeritae) と手を結ぼうとして、使節を派遣したことを伝えて、次のように述べている。

「そのとき、Hellestheaeus がエチオピア人を、また Esimiphaeus がホメーリタイを支配していたとき、皇帝ユスティニアヌスはユリアヌスを使節として派遣し、両国が宗教を共通にしているがゆえに、ペルシア人に対する戦争に、ローマと提携するよう要求した。かれは、エチオピア人がインドから絹を買い、これをローマ人の間に売ることによって、多額の金がえられようし、他方ローマ人には、一方にのみ利益をえさせて、かれらがもはや敵に金を支払うことを余儀なくされることがないようにするようにとの提案を行ったのである。(中略)ホメーリタイに関しては、(中略)ペルシア人の地に侵入することを要望した。(中略)そこでおのおのの王は、この要求を実行に移すことを約束して、使節を退去させた。しかし、どちらも同意したことを行わなかった。なぜなら、エチオピア人はインド人から絹を買うことができなかったからである。それはインドの船が最初に寄港する港には、隣接する国に住んでいるペルシアの商人が常

にいて、貨物全部を買いのが慣らわしだからである。またホメーリタイには、遠方までひるがっていて、それを渡るには長い旅を必要とする砂漠の地を横断し、それからさらにかれらよりはるかに好戦的な国民に向かって行くことは、困難だと思われたからである。(下略)」<sup>1)</sup>

この記事は、ユスティニアヌスがペルシアのササン朝(226～651)に対抗するため、またエチオピアを介して海上から中国産の絹を入手する道を開こうとして、エチオピアおよびヒムヤルに使節を派遣して政治工作を行ったが、それが失敗に終わったことを述べたものである。本稿では、ユスティニアヌスがなぜ使節を派遣して、このような政治工作を行ったのか、それはいかなる情勢の中で、いつ行われたのか、またそれが失敗したのはなぜか、ということについて、考察を加えてみたい。そのためには、当時のエチオピアおよびヒムヤルの状況やインド洋の貿易事情、さらに東ローマとササン朝との関係や両国間の絹貿易の事情などについて、検討してみる必要がある。

## II エチオピアおよび南アラビアの状況

当時エチオピアにはアクスム Axum (アクソーミテス Axōmites) 王国が栄えていた。アクスムの名は、すでに1世紀後半に書かれたと考えられる *Periplus Maris Erythraei* (『エリュトウラー海案内記』)に見られるが<sup>2)</sup>、この国が勢力をえてくるのは3世紀ごろからのようで、ナイル川上流のアビシニア高原から紅海の入口

1) Procopius, *History of the Wars*, I, xx, 9-12.

2) *Periplus Maris Erythraei*, 4.

あたり、あるいはさらに南のソマリーランド地方にいたるまでの広大な地域を支配していた。この国がキリスト教に改宗したのは、4世紀の前半のことらしく、インドへおもむく途中、紅海沿岸で難にあってこの国へ逃れた Frumentius という人物が、エジプトへ帰還後、当時アレクサンドリアの司教であったアタナシウス (295～373) によってエチオピアへの布教を命ぜられてからのことと伝えられている。その後、カルケドンの宗教会議 (451年) で単性説が否定されると、これを信奉するエジプトの僧侶たちがアクスム王国へ逃れ、それいらいこの国は単性説を信奉するようになったという<sup>3)</sup>。したがって、この国はユスティニアヌスのころは、異端に属していたわけである。

エチオピアは今日内陸国家である。またアクスム王国の首都アクスムは、上述の *Periplus Maris Erythraei* にも沿岸から5日行程のところにあると記されていて、今日エチオピア北部の Tigre 地方にその遺跡が見られるが<sup>4)</sup>、当時のアクスム王国は、紅海沿岸一帯の地を領有していたらしく、紅海に臨む港のアドゥーリス Adoulis (Adouli) はこの国の貿易港として栄えていた。この港は Annesley 湾の西岸、今日の Zulá (Thulla) に比定されており、首都のアクスムから120マイル (193キロ) ほどのところにある<sup>5)</sup>。6世紀のエチオピアの商人は、この港を拠点として、遠く海路インドやセイロン (スリランカ) にまでおもむいて、貿易を営んでいた。

次にホメーリタイ、すなわちヒムヤルの地は、アラビア半島の南西隅、今日のイエメン地方 (イエメンおよび南イエメン) に相当し、古代においては Saba', その他の小国が分立し、早

くから乳香や没薬<sup>もつやく</sup>の産地として知られ、またその住民は東西間の貿易の仲介者として活躍していたが、その後この地方はヒムヤル王国によって統一された。ここにはやがてキリスト教やユダヤ教も伝来するようになった。キリスト教はシリア方面の単性説の信奉者たちによって伝えられたもののようである。しかし、この地方の布教のために派遣されたとして知られている最初の人物は、アリウス派に属する Theophilus Indus で、かれはローマ皇帝コンスタンティウス2世 (337～361在位) の命を受けて、356年ごろこの地方にきて布教に従事し、アデン、その他に教会を建設し、エチオピアを経て帰国した。ヒッティはこの遣使には、ローマがペルシアに対抗するために、この地方を勢力範囲におさめようとした意図がうかがわれると推定している<sup>6)</sup>。

ユダヤ教もやはり北方から伝わったものらしく、ローマによるパレスティナの征服とイェルサレムの破壊 (70年ごろ) の結果によるものともいわれている。それはともあれ、6世紀にはユダヤ教はイエメン地方に相当広く普及していたらしく、ヒムヤル王国の最後の王 dhū-Nuwās はユダヤ教徒で、523年にキリスト教徒に対して激しい迫害を加え、多数のキリスト教徒を殺した。アラブの伝承によれば、辛うじて生き残った Daws dhū-Tha'labān がこのことをコンスタンティノーブルに訴えたので、全世界のキリスト教徒の保護者をもって任じる皇帝ユスティヌス1世 (518～527在位) は、アクスム王 Negus (碑文に見える Kaleb Ela-Aṣbeḥa に比定) にヒムヤルの征討を命じた。アクスム王は7万といわれる大軍を紅海をわたって派遣し、ヒムヤル王国を滅ぼしてしまった。この遠征は523年および525年の2回にわたって行われ、じらいイエメン地方は575年にササン朝によって征服されるまで、アクスム王の支配下に入るのである。この地方は4世紀にも一時アクスムに征服されたところで、おそらくアクスム王は東

3) 以上のエチオピアの状況については、主として C. Raymond Beazley, *The Dawn of Modern Geography*, Vol. I, 1897 (reprint, New York, 1949), pp. 206-208による。

4) 村川堅太郎訳『エリュトラー海案内記』生活社、昭和21年、134頁。ただし、プロコピウスは港のアドゥーリスから12日行程のところにあるとしている (Procopius, *op. cit.*, I, xx, 22)。

5) 村川、前掲書、134頁；注8の Cosmas, p. vii.

6) Philip K. Hitti, *History of the Arabs*, London, 1937, p. 61.

ローマ皇帝の要請をいわばお墨つきとして、進んでこの遠征に乗り出したものと思われる。この点から、ヒッティはこれまた東ローマのペルシアに対する対抗策の一つと見なすことができるといっている<sup>7)</sup>。

### Ⅲ 当時のインド洋貿易

さきにエチオピアの商人たちが、インドやセイロンにおもむいて、海上貿易を営んでいたことを述べたが、6世紀のころは、インド洋ではインドやセイロンの商人とならんで、ペルシアやエチオピアの商人が来航して貿易に従事し、とくにセイロンが東西間の貿易の中心市場をなしていたようである。その事情は、6世紀半ばごろに書かれたエジプトの修道士コスマスの *Christianikē Topographia* (『キリスト教世界地理』)<sup>8)</sup> からうかがうことができる。

コスマスははじめ商人として諸方を遍歴したのち、聖職者の道に入った人物で、上述の書は地球球体説を斥けて、地球は平板であり、宇宙はこの平らな大地の上を、イスラエル人が荒野をさまよったとき聖所として建てた「幕屋」のようにおおっているという、独特の地球観、宇宙観を述べたものである。しかし、この書にはかれが商人時代に実際に観察し、また商人や各地の住民などから伝聞したエチオピア、インド、セイロンなどの事情が記されていて、当時の東方世界の事情を知る上で、貴重な史料を提供してくれる<sup>9)</sup>。またこの書には、かれがアドゥーリス港におもむいたときは、ちょうどアクスム王 Elesbaan が対岸のホメーリタイに遠征

軍を送る準備をしていたときで、それはいまから25年ほど前のことであるという記述が見られるが<sup>10)</sup>、この遠征は上述の2回にわたるヒムヤル遠征(523および525年)のいずれかに相当するものと解されるので、これによってこの書の著作の時期が推定されるとともに<sup>11)</sup>、かれが商人として活躍していた時期も察知されるのである。すなわち、この書に述べられている東方世界の事情は、520年代の半ばを前後するころのことであると考えられる。

この書の中でとくに注目されるのは、セイロンを中心とする貿易事情についての次の記述である。

「これ(セイロン—引用者)はインド洋に横たわる一大海島で、インド人は Sielediba と呼び、ギリシア人は Taprobanē と呼んでいる。(中略)この島はいまは中心の位置にあるので、インドの各地やペルシアやエチオピアから船がひんばんにやってき、またこの島も同様に自分たちの船をたくさん外へ送り出している。またこの島は最も僻遠の国々——それは Tzinista やその他の貿易地のことなのだが——から、絹、<sup>アロエ</sup>蘆薈、丁字、白檀、その他の産物を受けとり、それらはさらに胡椒の生育する Male のような、こちらがわの商

7) 南アラビアの状況およびアクスムによるヒムヤル遠征については、主として Hitti, *op. cit.*, pp. 60-62 および George Fadro Hourani, *Arab Seafaring in the Indian Ocean in Early and Medieval Times*, Princeton Univ. Press, 1951, pp. 39-40 による。

8) この書はマックリンドルによって詳細な解説および注釈つきの下記の下記の英訳が刊行されている。The *Christian Topography of Cosmas, an Egyptian Monk*, translated from the Greek, and edited, with Notes and Introduction by J. W. McCrindle, Hakluyt Society, First Series, No. 98, 1897 (reprint, Burt Franklin, New York). コスマスの以下の引用はこの書による。Cosmas と略称。

9) コスマスはエチオピアの各地を旅行し、またアクスム王国の港のアドゥーリスを訪れたり、紅海を出てソマリーランドの沿海を航海したり、また大洋から流れこんでいる3つの湾、すなわち地中海、紅海、およびペルシア湾を航海したことを書いているが(Cosmas, Vol. II), インドやセイロンへ旅行したとは書いていない。したがって、インドやセイロンに関する記事は、実際にそこへいったことのある商人、その他の人々からの伝聞によるものではないかと考えられる。

10) Cosmas, Vol. II, p. 55.

11) この記事によってこの書が6世紀半ばごろに書かれたことが推定される。もっともこの書は一度に書きあげられたものではなく、時に応じて書き加えられた形跡がある。たとえば第10巻にはアレクサンドリアの司教のテオドシウスが現在コンスタンティノーブルに居住していると書かれており、またそのあとでかれの前任者の小ティモテウスが最近死んだということが書かれているが(Cosmas, Vol. X, pp. 351 & 353), 後者の歿年は535年であり、また前者は536年にコンスタンティノーブルから追放されたことが知られている。以上のことから第10巻はテオドシウスが追放される前に書かれたものと、マックリンドルは推定している(Cosmas, p. xi)。

業地や Calliena に送られてゆく。この Calliena は銅やゴマの木 (sesame-logs) や衣服製造用の布を輸出し、これまた大商業地である。また (絹, その他の僻遠の国々の産物は—引用者)麝香や海狸香を産し、また andros-tachys を産する Sindu やペルシアやホメリタイの国やアドゥーリにも送られてゆく。そしてこの島はいま述べたすべての商業地から輸入品を受けとり、それらをいっそう遠隔の港へと送り出し、他方、同時に自国の産物を両方の方面に輸出するのである。(下略)<sup>12)</sup>

以上の記述から、6世紀のはじめごろは、セイロンを中心として東西間の海上貿易が行われ、そこにはインド各地の商品ばかりか、モルッカ諸島産の丁字や中国産の絹など、はるか東方の国々からも商品が送られてき、エチオピアやペルシアの商人がこの島に来航して、貿易を営んでいたことが知られるのである。

セイロンで貿易が盛んに行われていたことは、コスマスより1世紀ほど早い5世紀のはじめにこの島を訪れ、2年間滞在したのち海路帰国した東晋の入竺僧法顕(337~422)も証言している。かれは帰国後『法顕伝』(『仏国記』)(全一卷)を著わしたが、その中でこの島を師子国と呼び、「諸国商人共市易」して、一種の沈黙貿易が行われたことや、商人が「晋地一白絹扇」を青玉の仏像に供えて供養している姿を見て、思わずホーム・シックにかられたことなどを書いている。また帰国に際して乗船した商船が200余人を乗せた「大舶」で、海難にあったときの用意に、小さな船を一隻背後にひいていた

こと、途中ベンガル湾で大風にあって遭難したが、無事に耶婆提に到着し、ここに5か月滞在中して順風を待ったのち、別の商船で帰国したこと、この船も200人ほどの人と貨物を乗せ、50日分の糧食を積んだ広州行きの船であり、順風ならば耶婆提から50日で広州に到着することなどを書いている。法顕が途中で船を乗りかえた耶婆提が、今日のどこに当るか明らかではないが、かれの記述によって、すでに5世紀のはじめには、セイロンと東方の海域との間にも、遠く中国にいたるまで、海上の交通が開け、商船の往来が見られたことが知られるのである<sup>13)</sup>。そればかりでなく、すでに法顕の航海以前に、東方の海域ではインド人や南海諸国の住民の海上活動が見られたことを示すさまざまな徴証があり、またマライ半島、インドシナ半島、インドネシア諸島には、インド文化が深く浸透していたのである<sup>14)</sup>。

#### IV 東ローマ=ササン朝の関係と絹貿易

南北にわたる長い国境線によって対峙していたローマとペルシアは、しばしば戦争を交え、また両国の間には領土、宗教、貿易、その他の諸問題をめぐって、緊張と対立の火種が常にくすぶっていた。しかし同時に、両国ともそれぞれ国内、国外の両方面にさまざまな問題をかかえていたから、絶えず対立をこととしていたわ

12) Cosmas, Vol. XI, pp. 363-67. なおこの引用文に出てくる Tzinista—かれは別のところでは Tzinitza とも書いている—is シナを指している。この語は *Periplus Maris Erythraei* の Thin, プトレマイオスの地理書の Sinae, サンスクリット語の Chinasthāna, ペルシア語の Chinistan, 『大秦景教流行中国碑』のシリア語碑文中の Tzinisthan と同系統の語であり、これらはすべて秦 (Ts'in) に由来していると考えられている。Male はインド半島南端に近い西海岸のマラバール地方のことで、ここは古来胡椒の産地として知られていた。また Calliena はボンベイに近い Kalyāna に比定されており、Sindu はインダス河口あたりのどこかを指していると思われる。

13) なお梁の慧皎の『高僧伝』には、インドやセイロンから海路中国におもむいたり、あるいは逆に中国からインドにおもむいたりした数名の僧侶の伝記が見られる。たとえば、求那跋摩はインドからセイロンへ渡り、ついで閩婆国におもむいて布教したのち、広州に到着し、元嘉8年(431)建業で宋の文帝に謁見しており、求那跋陀羅はインドからセイロンを経て元嘉12年(435)に広州に到着している。また僧伽跋摩は陸路中国へおもむいたのち、元嘉19年(442)に「随西域賈人舶—帰還外国—」している。これらはいずれも天竺僧であるが、中国僧の智嚴は中国=インド間を陸路往復したのち、再び海路インドにおもむいている(いずれも『高僧伝』卷三)。

14) セデスはインド人の東方海域での活動がキリスト紀元後著しくなったといっている (G. Coedes, *The Indianized States of South-east Asia*, tr. by S. B. Cowling, Honolulu, 1968, pp. 20-21). また Van Leuer は南海諸国の住民の海上活動を強調している (J. C. Van Leuer, *Indonesian Trade and Society*, The Hague, 1967, pp. 92 ff.).

けではなく、その時々的情勢に応じて、両国の関係は緊張と緩和を断続的にくり返したのである。とくに5世紀においては、両国の関係は比較的良好であった。また両国とも重大な関心をもっていた貿易については、しばしば協定を結んで取引地を指定し、貿易の円滑化をはかるとともに、その統制・独占に努めていることが知られる。その最初のものは297年に結ばれたもので、両国はメソポタミア北部の、当時はローマ領であった Nisibis を絹の唯一の交易地として定め、ほかのところで両国商人間の取引を禁止した。その後、5世紀のはじめには両国は再び協定を結んで、ローマ領メソポタミアの Calinicum、当時はペルシア領となっていた Nisibis、および同じくペルシア領アルメニアの Artaxata の3か所を両国間の交易地として指定した。それいらい、東ローマは民間の商人を排除して、これらの3地点に *commercarii* という国庫の役人を派遣し、かれらがペルシアの商人から一括して絹を買いとり、その一部を帝室の工場である *gynaeceum* 用に留保し、残りを帝国内の織物業者に売り渡すようになった<sup>15)</sup>。

このように両国の関係は比較的良好な時期もあったが、6世紀に入ると両国の関係は悪化して、502年にササン朝のカワード1世(488~531在位)が、ローマ領のアルメニアに侵入してきた。さらにユスティヌス1世の524年には、またもペルシア軍がコーカサス地方の Iberia に侵入し、これを契機にはじまった戦争は、ユスティニアヌスの即位(527年)後もおさまらず、ササン朝に新たに登場した ホスロー1世(531~579在位)との間で532年に結ばれたいわゆる「永久平和」によって、ようやく終熄を見えるという状態であった。しかし、540年にはホスロー1世は約束を破って、自ら大軍をひきいてシリアに侵入し、545年の休戦条約の締結まで戦

争状態が続いた。この条約は551年には更改されたが、その後もとくにコーカサスの Lazica 地方では不安定な状態が続き、562年に両国の間に「50年間の平和」が結ばれて、ようやく両国の関係は安定を見るのであるが、それはユスティニアヌスの死の3年前のことであった。

ユスティニアヌスはゲルマンの蛮族のために奪われた西半分の領土を回復して、古代ローマの栄光を復活するとともに、アリウス派の異端を駆逐して、正統派キリスト教にもとづく帝国の建設を完成しようとの情熱に燃えていた。かれの政策はすべてがここに向けられていた<sup>16)</sup>。かれがヴァンダルからアフリカを、また東ゴートからイタリアを奪還する戦争に全力を注いだのはそのためであるが、そのことからかれは東方に対しては、いきおい守勢をとらざるをえなかった。かれがササン朝の攻勢の前に再三にわたって和約を結んだのはそのためであり、かれはその都度、多額の金を支払って平和を購っているのである<sup>17)</sup>。このようにして、ユスティニアヌスはササン朝の攻勢に対しては、全力をあげてこれと対決するという強力な姿勢をとることはできなかったのである。

ササン朝との関係を安定させておくことは、絹貿易を円滑に行うためにも不可欠の要件であった。ユスティニアヌスのころの東ローマは、すでに破壊と混乱から回復しており、生活必需品の生産にはこと欠くことはなかったようであるが、絹をはじめとする珍奇な奢侈品の大部分は、東方世界から輸入しなければならなかった。「ローマの平和」を謳歌した1~2世紀のころは、アレクサンドリアを本拠とするギリシア系の商人が、紅海からインド洋を横断してインドの西北沿岸や南部の西海岸の商業地におもむい

16) George Ostrogorsky, *History of the Byzantine State*, tr. by J. Hussey, Oxford, 1956, p. 64.

17) たとえば532年の「永久平和」の締結に際しては、金11,000ポンドを支払っており、また「50年間の平和」には毎年3万ソリドゥスを支払うことを約束させられた(John W. Barker, *Justinian and the Later Roman Empire*, Univ. of Wisconsin Press, 1966, pp. 118 & 122; 弓削達「末期ローマ帝国の体制」〔岩波講座『世界歴史』7, 中世1〕, 48頁)。

15) G. F. Hudson, *Europe and China: a Survey of Their Relations from the Earliest Times to 1800*, 1931 (reprint, London, 1961), pp. 118-19; L. Boulnois, *The Silk Road*, tr. by D. Chamberlin, London, 1966, p. 119.

て、東方の物産を輸入しており、中国産の絹も、中央アジアから北インドにかけての地を支配していたクシャン（貴霜）朝の手を介して、西北インドの港で入手することができた<sup>18)</sup>。当時ペルシアを支配していたパルティアは、自国の領内を通過するシルクロードを利用して、絹貿易の独占を策したが、クシャン朝の台頭によってそれを有効に行うことはできなかった。しかし、ササン朝第2代の王シャープール1世（242～273在位）はクシャン朝を滅ぼして、遠くバクトウリアからオクスス川のかなたにまで進出し、ここにシルクロードの西半分は完全にササン朝の掌握するところとなった。ササン朝は東西を結ぶこの大動脈の所々に隊商宿や給水場等を設置して隊商の往来の便宜をはかると同時に、税関等を設けて貿易の統制に努めた。こうしてササン朝は絹貿易の独占を有効に進めるとともに、多額の財政収入をあげることができた。

他方、西方世界では、3世紀以降ローマ帝国の衰退につれて、西方商人の海路によるインド方面への往来も衰微の一途をたどるようになり、やがてインド洋はインドやセイロンの商人とならんで、ペルシアやエチオピアの商人の活躍舞台と化していったことは、すでに述べた通りである<sup>19)</sup>。

このような状況にあつては、東ローマが絹を

手にいれるには、エチオピア人の手を介するか、黒海から北方のステップ地帯を経る以外<sup>20)</sup>、ササン朝に依存するほかはなかった。他方、東ローマの絹の需要は高まるばかりであった。すでに4世紀の Ammianus Marcellinus は、貴族ばかりでなく、最下層の人々までが絹を使用することを指摘しているが<sup>21)</sup>、東ローマでは時を経るにつれて、東洋的な華美な風習がしだいに著しくなった。たとえば官僚貴族たちは長い絹の衣裳を着用するようになり、上層の男女の間にもこの風習がおよんでいった。聖職者たちも同様に絹の聖衣を着用し、高価な東方産の香をたくようになった。死者にさえ絹の衣服を着せて葬るようになったのである。その上、西方のゲルマン族も、ローマ世界に入ると、しだいにその華美な風習に染まって、好んで東方産の絹、その他の珍奇な奢侈品を求めるようになったが、それらは東ローマを通して入手するほかには道はなかった。さらに東ローマの皇帝たちは、かれらの求める絹、その他の東方産の奢侈品を、かれらに対する懐柔策の道具として用いたのである<sup>22)</sup>。こうして東ローマの絹の需要はますます増大するばかりであった<sup>23)</sup>。

18) 拙稿「西方世界とインド洋貿易——ヘレニズム時代・ローマ帝制初期を中心に——」（5）（『流通経済論集』8巻4号）56頁以下参照。また当時は絹は中国からガンジス河口を経てインド南西岸の商業地にも送られてき、西方の商人はここでも絹を入手することができた。

19) もっとも紅海やインド洋方面で、西方の商人がまったく姿を消してしまったわけではない。衰退期のはじめの3世紀の前半には、大秦の賈人の秦論が交趾に到着し、呉の孫権のもとに送られ、孫権がかれを引見してかの地の事情を聞いたことが、『梁書』巻54の海南諸国伝に記されている。また4世紀の前半に Frumentius がインドに行こうとして、途中アクスム王国の沿岸で難にあったことは、すでに述べた通りである。コスマスも Sopatrus という西方の商人が商用でセイロンへおもむいたことを書いており（Cosmas, Vol. XI, p. 368）、またプロコピウスはアクスムがホメーリタイを征服したのち、この地方の支配者として置いた Esimiphæus に対して反乱をおこし、かれにとって代った Abramus が、もとアドゥーリス港で海運業に従事していたローマ市民の奴隷であったということを書いている（Procopius, *op. cit.*, I, xx, 3-8）。

20) ステップ地帯から黒海を通じて毛皮や奴隷などがもたらされ、東ローマはこの方面の貿易の促進にも努力した。コーカサスの Lazica や Iberia 地方をめぐる、東ローマとササン朝がしばしば対立し、戦争を交えているのは、この方面の貿易路の争奪が主要な原因であったと考えられる。しかし、絹がステップ地帯を通じてもたらされるのは、次のユスティヌス2世（565～578在位）の治世で、突厥がソグディアナを占拠してからのものである。それまでソグディアナの住民はシルクロードによる中継貿易のにない手として活躍していたが、この地方が突厥の支配下に入ると、ササン朝がソグディアナ商人のペルシアとの交易を拒否したので、かれらは突厥の支配者に請うて、ササン朝領を通らない北方のステップ・ルートによって、東ローマとの間に絹の直接貿易を開こうとした。そのための突厥の使節がコンスタンティノープルへ派遣され、さらにこれに同行して東ローマの使節が突厥へ送られたことが、Menandros によって伝えられている。この記事については、内藤みどり氏による解説および注釈のついた下記の邦訳がある。「東ローマと突厥との交渉に関する史料——Menandri Protectoris Fragmenta 訳註——」（内陸アジア史学会編『内陸アジア史論集』大安、1964年、41-66頁）。

21) *Rerum Gestarum*, XXIII, 6, 67.

22) C. G. F. Simkin, *The Traditional Trade of Asia*, Oxford, 1968, pp. 56-57.

## V 遣使はいつおこなわれ、工作はなぜ失敗したか

いままで述べてきたような状況を背景として、ユスティニアヌスはエチオピアおよびヒムヤルに対する政治工作を企図し、ユリアヌスを使節として派遣したのである。かれは単性説の信奉者ではあるが、同様にキリスト教国であるアクスム王国およびその支配下にあるヒムヤルに働きかけて、ササン朝を側面からつかせるとともに、アクスムを介して海上ルートによって絹を入手する道を開き、ササン朝による絹の独占を打破しようとしたものと考えられる。

このような二重の目的をもった遣使は、それではどのような情勢のもとで、いつ行われたのだろうか。この遣使を伝えたプロコピウスは、遺憾ながらそれが行われた正確な年月については書いていない。しかし、かれは遣使の叙述に先だって、531年に当時東ローマ第一の名将といわれ、ユスティニアヌスの信任の厚かったBelisariusのひきいる東ローマ軍がCallinicumにおいてペルシア軍に敗れたときの戦闘について書いており、それは復活祭の祭りの行われる前日のことであったと述べている<sup>24)</sup>。次いでプロコピウスは章を改めて、その冒頭で「そのとき皇帝ユスティニアヌスには、ペルシア人を傷めるために、エチオピア人およびホメーリタイと同盟を結ぼうという考えが浮かんだ」と書いている<sup>25)</sup>。しかし、かれはそれからすぐに遣使の記述に移らないで、その前提として紅海、アラビア、エチオピア等の事情について述べ、次に再び章を改めて、アクスム王国によるヒム

ヤル遠征について記し、これに続いて本稿の冒頭に引用した遣使の記述を行っている。次いかれはさらに章を改めて、その冒頭で、Callinicumにおける敗戦の直後、Hermogenes——かれはCallinicumの戦闘の前にユスティニアヌスによってベリサリウスのもとへ派遣されていた<sup>26)</sup>——がササン朝のカワード1世のもとへおもむいて和議の交渉を行ったが、それが失敗に終わったこと、ベリサリウスをヴァンダル人との戦争にそなえるために、かれをコンスタンティノープルへ召還したこと、およびペルシアがまたも大軍をもってメソポタミアへ侵入してきたことを述べ、さらに両軍の間に戦争が行われている間に、カワード1世が重態におちいり、後継者としてホスローを指名したのち、歿したことを書いている<sup>27)</sup>。

プロコピウスの以上の記述によって、531年4月のCallinicumの敗戦のあとで、この危機に対する対策の一つとして、アクスムおよびヒムヤルへの遣使が行われたことがうかがわれる。その正確な時期は明らかではないが、プロコピウスの記述の順序から見て、またとくにユスティニアヌスにアクスムおよびヒムヤルと同盟を結ぼうとの考えが浮かんだのは、Callinicumの敗戦のときであったと受けとれるようにプロコピウスが書いているところから考えて、遣使はこの敗戦の報がコンスタンティノープルにもたらされてから、あまり遠くないときに行われたと考えることができよう。531年4月の敗戦からこの年9月のカワードの死までの5か月間は、東ローマにとってすこぶる多事多難であったことが、プロコピウスの記述から推測されるが、おそらくユスティニアヌスは敗戦の報に接すると、一方でササン朝との和議を進めるとともに、ユリアヌスを使節としてアクスムへ派遣したのではなかろうか。

次に工作がなぜ失敗したかについて考えてみよう。工作はペルシアへの進攻と海上ルートに

23) このような絹の需要の増大から、絹織物工業もシリアを中心として発達したが、おそらく5世紀ごろからコンスタンティノープルにgynaeciumという織物工場が設けられ、多数の婦人を用いて宮廷貴族の着用する絹衣を生産するようになり、のちにはアレクサンドリアやCartagenaにもこれらが設けられるようになった(Bournois, *op. cit.*, p. 121)。

24) Procopius, *op. cit.*, I, xviii, 15. Loeb Classical Library 所収のプロコピウスの著作の第一巻によれば、それは531年4月19日のことである(同 Library, Procopius, Vol. I, p. 163)。

25) Procopius, *op. cit.*, I, xix, 1.

26) *Ibid.*, I, xviii, 16.

27) *Ibid.*, I, xxi, 1-4 & 7-19. なおカワード1世が歿したのは531年9月13日のことである(Loeb Classical Library, Procopius, Vol. I, p. 199)。

よる絹の入手の2つの目的をもって行われた。前者に関しては、ヒムヤルにペルシアの側面——おそらくペルシア湾方面から——をつかせようとしたのであろう。プロコピウスは、砂漠地帯を遠距離にわたって強力なペルシアに向かって進軍することが困難であったことを、工作失敗の理由としている。しかし、アラビア半島の南端には、砂漠の縁辺に早くから香料輸送のための交通路が、ペルシア湾方面に向かって開かれていたと考えられる。こうしたことから考えると、むしろ当時のヒムヤルが6年ほど前にアクスムの征服を受け、以後その支配下において貢納を課せられ、国力が十分回復できていなかったことに、かれらが立ちあがることのできなかった理由が求められるように思われる。東ローマの強大な勢威をバックにした使節ユリアヌスの交渉の前に、おそらくヒムヤルはやむをえず承服はしたものの、とうていそのような計画を実行に移すことはできなかったのではなかろうか。注19で述べた Abramus らの反乱軍のために、やがて Esimiphaeus の政権は打倒されることをプロコピウスは伝えているが、このことは当時のかれの支配が脆弱であったことを示しているものとも考えられる。

次に絹の入手については、アクスム王国の商人が当時盛んにインド洋上で活躍していたことから考えて、もとよりアクスムにとっても有利な提案であったであろう。それが失敗に終わった理由は、おそらく当時のインド洋の貿易事情のうちに求められるように思われる。プロコピウスもインド人の運んでくる貨物全部をペルシア商人が買い占めていたことを、失敗の理由としている。しかしそれならば、なぜペルシア商人がエチオピア商人を排除して買い占めができたのかということが、改めて問われなければならないであろう。プロコピウスはペルシア人がインド人の隣人だということを、その理由としているが、ペルシア湾頭の Ubullah やファールス地方の Sirāf 港——ここでは近年発掘が行われて、イスラム時代の遺構の下にササン朝時代の遺構が発見された<sup>28)</sup>——からインド洋貿易の

中心市場であるセイロンまでは、当時としてはすこぶる遠距離であったといわなければならない。ハイドは隣人であるということのほかに、ペルシア人が古くからの顧客であったということを描している<sup>29)</sup>。またホウラニはペルシア商人がしっかりと根をおろした顧客であったから、セイロン商人はこの大切な顧客のライヴァル（エチオピア商人）と取引して、かれらの感情を害したくなかったからだと推定している<sup>30)</sup>。しかし、セイロン商人にとっては、エチオピア商人もやはり大切な顧客だったのではなかろうか。またハドソンはセイロン市場において、当時ペルシア商人は絹を、エチオピア商人は香料類を買いつける協定が両国商人の間にあったことを想定し、このことを工作失敗の理由としている<sup>31)</sup>。この推定はすこぶる興味深いものではあるが、いささかがちすぎた解釈のようにも思われる。むしろ海路による絹の輸送が、当時はまだきわめて少なく、そのために買い占めを行うことが比較的容易であったこと、およびセイロン市場においてペルシア商人が優越した力をもって、エチオピア商人に絹の買いつけを許さなかったことに、工作失敗の理由が求められるように思われる。またさらにその背後には、絹貿易の独占をはかるササン朝の手が働いていたことも考えられる。

コスマスはペルシアと中国の間の距離は、陸路の方が海路よりもはるかに短く、そのために大量の絹が陸路をペルシアに運ばれてくると書いている<sup>32)</sup>。この記事は、当時ペルシアに送られてくる中国産の絹の多くが、陸路によってい

28) David Whitehouse and Andrew Williamson, "Sassanian Maritime Trade," *Iran*, Vol. XI, 1973, pp. 33-35; D. Whitehouse, "Sirāf: a Sassanian Port," *Antiquity*, XLV, 1971, pp. 262-266. なおホワイトハウスは1968年いらい *Iran* 誌上にシーラーフの発掘報告を掲載している。

29) W. Heyd, *Histoire du commerce du Levant au moyen-âge*, II<sup>me</sup> réimpression, Leipzig, 1936, t. I, p. 6.

30) Hourani, *op. cit.*, p. 44.

31) Hudson, *op. cit.*, pp. 111-13. シムキンもハドソンの見解を踏襲している (Simkin, *op. cit.*, p. 55).

32) Cosmas, Vol. II, pp. 47-49.



たことを示唆してくれる。もっともかれは絹が海路セイロンへも送られてくることを指摘しているわけであるが、上述の記事からセイロンへ送られる絹の量は、陸路ペルシアに送られる量よりはるかに少なかったと推定してさしつかえなかろう。

他方、当時のインド洋貿易においては、ペルシア商人がすこぶる大きな勢力を占めていたことが推測される。Whitehouse および Williamson は、ササン朝が建国の当初から陸上での進出とならんで、ペルシア湾への進出を積極的に推進し、さらに5世紀のはじめにはインダス河口地帯に進出して Daibul を獲得し、このようなササン朝の勢力拡張に伴って、ペルシア商人も6世紀にはインド西岸からセイロンへ進出して、その市場を支配するようになり、ササン朝もアデンからセイロンにいたる海域で、自国の商人の活動に保護を加えたといっている<sup>33)</sup>。この主張には検討すべき問題がいろいろあるであろうが、ユスティニアヌスの政治工作が行われたころ、セイロンを中心とするインド洋貿易において、ペルシア商人が強力なササン朝の勢力を背景として、圧倒的な優位を占めていたことは、十分考えられるところであり、とくにペルシア出身のネストリウス教徒が大きな役割を演じていたように思われる。コスマスはセイロンやマラバール地方にキリスト教徒がおり、教会が設けられていること、また Calliena にはペルシアから任命された司教 (bishop) がいると書いており、さらにセイロンに関する記述の中でも、この島にはペルシアのキリスト教徒が住んでいて、教会もあり、またペルシアから任命された長老 (presbyter) がいるが、土着の住民や王は異教徒であるとしている<sup>34)</sup>。キリストの12使徒の1人である聖トマスがインドに伝道におもむいたという所伝が事実かどうかについては、これを否定する見解が有力のようであるが、しかしインドには早くからキリスト教が伝わったさまざまな徴証が見られる<sup>35)</sup>。とくに4世紀

の半ばには、ササン朝の迫害を受けたペルシアのキリスト教徒が、インドの南西岸に移住したことが伝えられている<sup>36)</sup>。いずれにしても、6世紀のはじめにはインド西岸やセイロンにキリスト教徒のいたことが、コスマスの記述からうかがわれるのであり、さらにかれの記述から、おそらくこれらのキリスト教徒の多くは、当時ペルシアに本拠のあったネストリウス教徒であったろうということが推測される。コスマスはこれらのキリスト教徒が商業に従事しているとは書いていないが、おそらくこれらのペルシア出身のネストリウス教徒が、商人としてインド西岸やセイロンにしっかりと根をおろし、活発に貿易活動を営んでいたのではないかと考えられる<sup>37)</sup>。

さらに絹貿易の独占に重大な関心をもっていたササン朝は、絹がエチオピア商人の手を介して東ローマへ流れることに、常に警戒を怠らなかったのではなかろうか。かれらはかつてパルティア時代に、クシャン朝によって絹貿易の独占を破られた苦い経験を認識していたであろうし、多額の財政収入を期待でき、かつ東ローマとの交渉の有力な手段にも利用できる絹貿易の独占をどこまでも防衛することに、大きな努力を傾けたに相違ない。

ユスティニアヌスのアクスム王国およびその支配下にあったヒムヤルに対する政治工作は、このようにしてもろくも失敗に終わったのである。

しかし、やがてササン朝にホスロー1世が登

35) 佐伯好郎著『景教の研究』東方文化学院東京研究所、昭和10年、294-301頁。

36) ジョン・スチュアート著、賀川豊彦・熱田俊貞訳『東洋の基督教景教東漸史』豊文書院、昭和15年、133頁以下および溝口靖夫著『東洋文化史上の基督教』理想社、昭和16年、113頁以下。

37) 後世のものではあるが、11世紀の Seert の Chronicle によれば、ササン朝のヤズデギルド1世(399~420在位)は、インドおよびセイロンから帰ってくる船舶の海賊行為を取り締るために、Ahai というネストリウス派の教長 (Catholicos) をフェールス地方へ派遣したという。ホワイトハウスおよびウィリアムソンはこのことについて、ネストリウス教徒がこの仕事に最も適していたとすれば、ペルシア湾の商人の中にはネストリウス教徒が含まれていたであろうといっている (Whitehouse and Williamson, *op. cit.*, p. 43)。

33) Whitehouse and Williamson, *op. cit.*, p. 45.

34) Cosmas, Vol. III, p. 119 & Vol. XI, p. 365.

場するにおよんで、翌 532 年両国の間に「永久平和」が結ばれたことは、すでに述べた通りである。またユスティニアヌスの治世がまだ終らない 6 世紀の半ばには、養蚕の技術がササン朝の目をかすめて、コンスタンティノープルへ伝えられた<sup>38)</sup>。もちろんこれによって東ローマの絹問題が解消したわけではないが、これ以後東ローマでは絹織物工業がいっそうの発展をとげ

て、やがてこの国の産業において重要な位置を占めるようになるのである。

---

38) 養蚕の東ローマへの伝来は、プロコピウスおよび Theophanes によって伝えられている。Procopius, *op. cit.*, VIII, xvii, 1-8. テオファネスの記事は、Müller, *Fragmenta Histor. Gaec.*, iv, 270 に採録されている。Henry Yule, *Cathay and the Way Thither*, revised by H. Cordier, Hakluyt Society, Second Series, No. XXXVIII, Vol. I, 1915, pp. 204-205 にその英訳がある。